

## 令和2年度 第1回愛知県生涯学習審議会社会教育分科会会議録

### 1 開催期日

令和3年3月19日（金） 午前11時10分から正午まで

### 2 場 所

愛知県議会議事堂ラウンジ

### 3 出席した委員 計7名

池田 紀代美、大村 恵（分科会長）、河野 ともえ、志村 貴子、  
三輪 宮子、山内 晴雄、吉田 真人

### 4 欠席した委員 計3名

大石 益美、加藤 まゆみ、久保田 力

### 5 会議に付した事項

#### (1) 議題

- ア 愛知県総合教育センター移転及び愛知県青年の家閉館について
- イ コロナ禍における社会教育の在り方について

#### (2) 報告

- ア 令和3年度社会教育関係事業（案）について
- イ 令和2年度社会教育関係団体補助金交付事業の結果について

### 6 議事の経過

- 分科会長・分科会長職務代理者の選出  
分科会長に大村委員を選出
- 分科会長職務代理者の指名  
分科会長から山内委員を分科会長職務代理者に指名
- 会議録署名人の指名  
分科会長から志村委員と三輪委員を署名人に指名
- 愛知県総合教育センター移転及び愛知県青年の家閉館について  
各委員からの詳細な意見は別紙のとおり
- コロナ禍における社会教育の在り方について  
各委員からの詳細な意見は別紙のとおり
- 報告  
事務局から説明  
各委員からの詳細な意見は別紙のとおり

<愛知県総合教育センター移転及び愛知県青年の家閉館について>

- 「県民向けの研修会に教職員も参加し、共に学べるしくみを構築する」点についての青年の家の活用方法を今後議論ができるとよい。

<コロナ禍における社会教育の在り方について>

- 就園前の子供を対象に活動をしていることが多いので、最初は基本的に活動を全部中止にした。その後状況がよくなり、人数を3分の1や半分にして実施をしたが、再び状況が悪化したときに、保護者の悩みや依頼を少しでも解決できるように、WEB会議システムを使った。

これまでは、「就園前の子供には、ふれあいが大切である」と言っていたが、そのことができなくなった状況でも、「何とかできることをしよう」と思って頑張ってきた。保護者には、いろいろなところから参考になる多くの話が発信されていることを、SNSなどを使って広げていけるとよい。

- 愛知県地域婦人団体連絡協議会が中心としている事業は、地域とのつながりである。コロナ禍の中であっても、「何か自分たちでできることがないか」と、地域の実情に合わせて考えてきた。例えば、最初の頃は、マスクが足りないということで、マスクを作って配付をしたり、お年寄りが外出できないということで、健康になるために簡単にできる体操を紹介したりした。また、SDGsの勉強会を行うなど、「何もできないのではなくて、とにかくできることを探してやっ払いこう」と考え、実践している。

- 幼稚園では、コロナ禍の中で集まって話を聞くときにも、できるだけ園児たちの椅子を離して座らせるなど工夫して行っていたが、どうしてもうまくできないときもあった。小さい子供は、体が触れ合うことでつながりを実感し、信頼関係が構築され、友達同士の関係もできていく。コロナ禍の中でも、少しずつできることを工夫しながら行うことを目標に、これまでも努力しながら活動に取り組んできた。

他にも、未就園児の遊びの会を行い、子供同士や親同士のつながりを作る場を提供している。また、未就園児の遊びの場を提供するため、園児が帰った後の園庭を開放している。

- 経営している幼稚園、高校、短大、大学では、大変な状況だった。特に高校生や大学生は、皆が集まり一緒に活動することが大変重要だが、全然できていない。教育界では、オンライン化がここにきて一気に進んできた。教員にとっては、オンラインで子供たちに興味を持ってもらう授業をどれだけ展開できるかが大切になってくる。

高齢の方が、オンライン化やICT化に対してスムーズに移行し、そして、その中でつながりをどう持ち続けられるかが課題であると感じている。学校として地域との包括的な提携を多くしているが、全くできない状況で、これから地域との提携をどのように構築していくかが課題である。

- このコロナ禍が2年続くと考えたとき、この間、子供たちは五感を使って学ぶことができず、その影響がどうなるか心配である。作家の島崎藤村の言葉に、「人の世に三智がある。学んで得る智、人と交わって得る智、自らの体験によって得る智がそれである。」がある。この言葉は、学校教育の中ではとても大切である。「学んで得る智」については、オンラインなどを使えば何とかなるが、「人と交わって得る智」、「自らの体験によって得る智」が疎かになってしまう。この状況の中で、保護者は教育内容の遅れを心配しているが、心の発達の遅れが一番心配である。
- 一年前、学校が休校になったとき、子供の学びの場である図書館は使うことができなかった。市の担当者からは、「市の方針で使えない」と言われたが、行政から一方的な指示で決められている感じを受けた。市の施設もさまざまな用途があり、同じ対応でよいかと疑問を感じた。「密を避ける」とよく言われるが、田舎まで同様な対応を要求する必要性にも疑問を感じた。現場の責任者がその場の状況に応じて判断することも大切になってくると感じている。
- NPO法人で活動をしており、これまで、子供たちに夏休みにさまざまな体験活動をしてもらうイベントを実施し、2日間で1,000名程度集まっていたが、今年度は実施できなかった。それに替わるものとして、WEB会議システムを使ってのイベントを開催したり、活動の様子が分かる写真をSNSで発信したりした。  
また、子供の居場所づくりをする取組では、デジタル化も進んだが、「子供はそばにいないといけない」という考えも根強い。子供に体験活動をさせることが中心なので、このコロナ禍の中では大変だが、その中でできることを見つけて、工夫すれば活動できることが分かった。
- 委員の皆さんが大変な状況で苦勞をし、その中で工夫されていることが分かった。このような取組を全県で交流できるとよい。また、「現場の責任者が判断できる」ことが必要で、一人一人が今の状況を把握し、安全について判断できることが大切である。これは、SDGsや新学習指導要領の考え方にも共通しており、今後、社会教育の中で行っていく必要がある。

<令和2年度社会教育関係団体補助金交付事業の結果について>

- 1月に準備を終え、あとは本番というところで、残念ながら中止となったが、「何かできることはないか」ということで、オンラインでの開催となった。この大会をとおして、やれることに前向きに取り組んでできたことは大変よかった。